

ナチズムの時代とドイツ・バプテスト同盟

片 山 寛

1933年から1945年までのいわゆるナチズムの時代のドイツのキリスト教会について、以前は、告白教会を善玉とし、ドイツのキリスト者を悪玉とする単純な対立図式だけで論ずる傾向が強かった。しかし近年はむしろ、この時代を生きたもっと多様な教会像を検討する論考が多く見られるようになった。たとえば、Philipp Thull (Hrsg.), *Christen im Dritten Reich*¹⁾においては、これまでもよく見られた、DEK (ドイツ福音主義教会) 内部の上記の闘争と、カトリック教会内の諸問題の検討の他に、いくつかの教派 Neuapostolische Kirche, Mennoniten, Pfingstbewegung, alt-katholische Kirche におけるナチズム時代が、それぞれの著者によって論じられている。そしてその最後に、Karl Heinz Voigt²⁾は、「自由教会」と総称で呼ばれる15の小教派 (上記とも重なるが、メノナイト、バプテスト、バプテスト系の兄弟団、エリム教会、メソジスト、福音主義共同体、ヘルンフト兄弟団、自由福音教会、セブンスデイ・アドヴェンティスト、古ルター派教会、古カトリック教会、救世軍、ミュールハイム連盟、神の教会、(ペンテコステ系の) フォルクスミッシオン) について、それらが DEK の告白教会運動から疎外された状況を論じている。自由教会はナチズムと闘うことができなかったことを批判されることが多く、自由教会自身がそれについて苦い後味を抱いているのであるが、それは彼らのせいだけではなかったというのである。

この発表で特に取り上げたいのは、ドイツのバプテスト同盟 Bund der

1) *Christen im Dritten Reich*, Darmstadt WBG 2014. これは15人の著者によるアンソロジーである。

2) Karl Heinz Voigt, *Freikirchen im Nationalsozialismus — Anmerkungen zur Freikirchenforschung*, in: *Christen im Dritten Reich* (cf. Anm. 1), S. 95-104.

Baptistengemeinden (1942年にいくつかの小教派を統合して、福音主義自由教会同盟 Bund Evangelisch-Freikirchlicher Gemeinden に改称した。現代もバプテストはこの名称を使用している) がナチズムの時代をどのように生きのびたのかについてである。それを私は、Günter Balders の論文「ドイツ・バプテスト小史」の第5章「第三帝国と第二次世界大戦の時代 (1933-1945)」³⁾にもとづいて紹介したい。その上で、自由教会としてのバプテストが、どのようなものであり、どのような点で優れ、またどのような点で限界を持っていたかを考察したいと思う。

■ ナチズムの時代のバプテスト

Voigt は上記論文で、「いかなる自由教会も、ナチズムの支配した時代を振り返って、自慢することはできない。どの教会も、それぞれの仕方での時代を生き延び、苦しみを味わった。どの教会にとっても、この時代は何らかの苦い後味を残したのである」と述べている。この同じことはバプテストにも言える。Balders 論文は、1984年に、戦後はじめてバプテストが自らの苦い過去を振り返ったものであるが、その最初に彼はこう述べている。

「第三帝国の終焉以後の40年間、『ハーケンクロイツの下で』のバプテスト教会の歴史は書かれないうままであった。その原因は資料不足にあるのではない。なぜなら資料は、文書館にはたくさん残っているからである。……バプテストには〔過去を検証しようという〕意欲が完全に欠けていた。教会闘争にわずかにでも類似するような取り組みが、バプテストには——ほかの自由教会も同じであるが——存在しなかったからである⁴⁾。バプテストは、たとえば告白教会の「バルメン宣言」(1934年) や、戦後の福音主義教会の「シュトゥットガルト罪責

3) Günter Balders, Kurze Geschichte der deutschen Baptisten, in: *Ein Herr, ein Glaube, eine Taufe – 150 Jahre Baptistengemeinden in Deutschland 1834-1984, Festschrift Im Auftrag des Bundes Evangelisch-Freikirchlichen Gemeinden in Deutschland*, Oncken Verlag Wuppertal und Kassel 1984 (以下 *Ein Herr* と略記), S. 17-167.

4) *ibid.* S. 86f. 青木紋子, 片山寛訳「ナチス時代のドイツのバプテスト教会(1)」『西南学院大学神学論集』72巻1号, 2015年, 75頁。

宣言」(1945年)、「ダルムシュタット宣言」(1947年)のような、ナチズムに対する抵抗や敗北の総括を言葉で表すことも、障害者抹殺やユダヤ人殺害への抵抗、戦争に対する批判や抵抗などを組織的に行うこともできなかった。その苦い思い出が、自らの歴史を振り返ることを阻んできたのである。

バプテストのとった態度は、いくつかの例外を除けば、国家に対して積極的に協力することではなく、むしろ教会闘争の両方の立場に対して距離を置き、「全体主義国家において、ただ順応し沈黙すること」⁵⁾によって、自らの立場を守ったということであった。バルダースは、そこに含まれた「かけひきや妥協を告発・清算することが、私の課題だとは思わない。しかしそれらを正当化しようとは思わない」と述べている。彼はただ、事実をできるだけ正確に記録しようと試みる。このバルダースの立場は、この論文が書かれた翌年(1985年)に、リヒャルト・フォン・ヴァイツェッカー大統領が連邦議会演説『荒れ野の40年』で示した立場と基本的に一致している。「問題は過去を克服することではありません。さようなことができるわけではありません。後になって過去を変えたり、起こらなかったことにするわけにはまいりません。しかし過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすいのです」⁶⁾。

以下では、ナチスの支配の下でバプテストがとった態度をバルダース論文から拾い出して略述する。

1. 1933年にヒトラーが政権の座に就いたときに、バプテストの中にはナチズムに対する両様の反応があった。片方には、Paul Schmidt 1888-1970に代表される、強い警戒感があった。シュミットは1930年から32年まで「キリスト教的社会的国民奉仕」という名の小政党で国会議員をつとめた経験があり、戦前・戦後のバプテスト同盟の事務局で出版関係の編集者として働いた人物であり、ナチスの政治家たちの表も裏もよく知っていたのである。彼は1930年の著作で次のように述べている。「私たちは国家に対して、一定の緊張関係を保っている。それによって私たちは国家の偶像化や民族カルトに対して距離を保っている。

5) *ibid.* S. 87, 邦訳 76 頁。

6) 『荒れ野の 40 年』(永井清彦訳) 岩波ブックレット NO.55, 1986 年, 16 頁。

そして微妙な距離を保ち続け、そのようにして国家の良心であり続けているのである」⁷⁾。彼はナチスの権力掌握の時にも、警戒感を隠していない。「私たちはすべてのうちに神の手をみることができる——救いへの、裁きへの、いずれにしても歴史の完成への神の手を。……もっとも私たちは次のことを知っている。すなわちこのご主人様たちも水をワインに変えることはできないのだ」⁸⁾。

しかしバプテストの中には、ヒトラーの登場を歓迎する人々もいた。1933年の終りに、一人の引退牧師（Gottlob Maier）は感激をこめて以下のように書いた。

「神ご自身が、我々の偉大な総統にして首相である人を、苦く厳しい青年時代に準備なされたのだ。そしてちょうど良い時に、すなわち我々没落しつつある民族を破滅の淵から引き上げ救出するための最後の時に、召し出されたのである。そして彼は最高のお方（神）の援助で短時間のうちに、なんとすべてを達成したことであろうか！ 彼は神の正義と真実を頼みとして、山をも動かすほどの信仰によってその巨大な仕事へと接近していったのである。……我々の民族的首相はその根本命題と理念として聖書の思想と神の真理を持っているのである」⁹⁾。

政権奪取直後のナチスが多くのキリスト教徒の支持を集めた理由として、以下のことが挙げられる。第一は、国際的な共産主義運動に対する警戒感が強かったことである。共産主義はキリスト教を滅ぼすものだと理解されており、またヒトラーは共産主義の中心はユダヤ人だとするデマを流しており、第一次大戦の敗北も彼らの陰謀によるものだと主張した。それをまともに信じる人は知識人には少なかったが、一定の宣伝効果をあげていた。第二は、第一次大戦後の深刻な不況を、ヒトラーは政権奪取直後の一連の政策によって、克服したように見えたことである。600万人もの失業者が、「財政の魔術師」ヒャルマル・シャハトの経済政策によって、数年後にはなくなっていた。それは「経済奇蹟」と呼ばれたのである¹⁰⁾。第三の理由は、この頃のヒトラーとその周辺がた

7) Ein Herr, S. 88, 邦訳 77 頁。

8) ibid. S. 89, 邦訳 78 頁。バプテストの機関紙 *Der Wahrheitszeuge* (『真理の証人』誌、以下 WZ), 1933, S.54. この雑誌は週刊 (8 頁前後) だが、頁は年間で通し番号だった。

9) ibid. S. 90, 邦訳 80 頁。WZ, 1933, S. 431.

10) セバスチャン・ハフナー『ヒトラーとは何か』(赤羽龍夫訳) 草思社 1979 年 32 頁以下。cf. Sebastian Haffner, *Anmerkungen zu Hitler*, Fischer Taschenbuch, Frankfurt am M., 2013³⁰, S. 34ff.

くみに「信仰深い穏健な指導者」を演出していたことである。1933年3月21日の首相就任式において、ヒトラーはヒンデンブルク大統領に忠誠を誓い「私たちは国家の建設のためにはキリスト教の力は不可欠であると考えている」と表明した。また彼は、「どこからあなたは弱まることなきエネルギーを得ているのですか」というインタビューに対して、ポケットからボロボロになるまで読んだ新約聖書を出して見せることにしていた。このようなジェスチャーに騙されてしまったことについて、バルダースは「政治的にはナイーブなお人よし」(die politisch naive Gutgläubigkeit) だったと批評している¹¹⁾。

2. ナチズムの主張する均制化政策に対しては、バプテストは十分には抵抗できなかったが、唯々諾々と従いもしなかった。均制化 Gleichschaltung というのは、超法規的にすべての権限をヒトラーとナチスに集中させ、他の社会的な権威をすべて骨抜きにしてゆく一連の政策を意味する。その中心となったのは「指導者原理」Führerprinzip である。これはドイツ国内のあらゆる団体が、唯一の指導者を持つべきであり、この指導者は下の成員に対する絶対的な支配権と、上位の存在(国家の管理者)に対する無条件の服従義務を有する、というものである。バプテスト同盟は従来、会衆主義および各個教会主義に立っており、同盟評議会、同盟主事会といったいくつものレベルでの集団的指導権が並立してバランスを保っていたが、ナチスが政権を握った後、指導者原理を不完全ながら導入して、1933年、3名の同盟長老会による集団指導体制をとることになった。しかし、形式的にはこの集団指導体制は残ったものの、バプテストの各個教会はそれを嫌い、1936年には同盟長老会の人数が拡大されて、従来の同盟理事会と似たようなものになった。そして実質的には長老会議長のフリードリヒ・ロックシースではなく、同盟本部長 Bundesdirektor のパウル・シュミットが、バプテストの諸教会を指導するという体制が定着した。

3. 1934年は、ドイツにおけるバプテスト発足100年記念の年であった。それを記念してこの年、バプテストの世界大会がベルリンで開催された。ナチス・ドイツはこれを全面的に歓迎して、資金援助を申し出た。心配された言論の自

11) Ein Herr, S. 91, 邦訳 81 頁。

由への妨害もなく、ナチスや人種問題に対する批判的表明も可能であった。大会そのものは「大成功」だと思われたのだが、以下のアルフレート・ローゼンベルク（当時、ナチスの対外政策全国指導者）の発言は、大会成功の喜びにひたるバプテストに冷水を浴びせるものである。

「妨げられることもなく、むしろ国家によって歓迎されて、つい先日ベルリンでバプテスト世界大会が開催された。そして私たちが望むのは、この大会の参加者たちがドイツ民族の宗教的寛容についてもよい印象を共に携えて、それぞれの母国へと持ち帰ることである。これに反して私たちが抗議したいのは、次のことである。すなわち、古臭い宗教の者どもが小さな宗教的グループを抑圧するために国家権力を要求する、ということである。そしてこのようなこと（抑圧）が起こらないものだから、しばしば思うようにならないという不当な抗議が声高になってしまうのである。」¹²⁾

ここには、ナチスがバプテスト世界大会を歓迎した二つの目的が語られている。ひとつは、ナチス・ドイツの「宗教的寛容」を世界に宣伝することによって、1936年に予定されていたベルリン・オリンピックの道備えをすることである。もうひとつは、「古臭い宗教の者ども」、すなわちドイツ福音主義教会に対する示威である。この同じ1934年の5月に、彼らはバルメンにおいて告白教会会議を開催し、『バルメン宣言』を採択していた。ローゼンベルクの発言が示しているのは、ナチズムがバプテストを始めとする自由教会を寛大に扱ったのは、バプテスト主義を支持したためではなく、むしろ領邦教会を相対化するぞと脅し、反対勢力を弱体化させるためなのであった。

4. この同じ構図は、1937年に世界教会大会が英国のオクスフォードで開催されたときにも繰り返された。当時教会闘争の中にあつたドイツ福音主義教会の代表者たちはオクスフォードに行くことを許可されず、自由教会を代表して、バプテストのパウル・シュミットとメソジストの司教 Otto Melle 1875-1947が行くことになったのである。それはちょうど、告白教会のマルチン・ニーメラー牧師が7月1日に逮捕・拘禁され、世界の注目を集めているさ中のことであつた。7月21日に「ドイツの使信報告」があり、オットー・メレがナチス・ドイツを弁護する講演をした。またこの大会では、弾圧下の告白教会に連帯する決

12) *ibid.* S. 94, 邦訳 86 頁。『*Völkischer Beobachter* (国民の目撃者)』1934年8月22日号。

議がなされたのだが、それに対してメレは次のような反対声明を發表した。

「ドイツ福音主義自由教会連合は、次のことに感謝しています。すなわち私たちはキリストの福音を宣べ伝える自由を制限されておりませんし、またドイツにおいて伝道と牧会と社会的配慮と社会建設においてなすべき私たちの奉仕を実行する機会を与えられているということでもあります。」¹³⁾

カール・バルトはこのことについて、バプテストとメソジストを痛烈に皮肉っている。

「オクスフォードに出席していたドイツの自由教会（メソジストとバプテスト）の代表たちにとって、この機会に告白教会の背中を突き刺すことが正しいように思えたということは、驚くべきことであり、恥ずかしいことであり、しかしまた教訓的でもある。……実際今なおドイツの自由教会は大目に見られている。……さしあたり、彼らが証明したことは、正しい教会であるためには、国家権力から表面的に「自由な」教会であるということではまだ不十分だということである。正しい教会であるためにはもう一つ別の自由が現に必要なのである。その自由こそ、ドイツのメソジストとバプテストが明らかに所有していないものである」¹⁴⁾。

ナチズムの時代の自由教会が、ナチス権力の側からどのように見られていたのかは、戦後になって公表された、親衛隊全国指導者ハインリヒ・ヒムラーの作業指示（1937年7月18日付け）が最も雄弁に語っている。

「無害な教派ども Harmlose Sekten は…さしあたりは顧慮なく存続させておこう。それは根本的に当然のことながら、教会的宗教的な領域に存在している分断状態をなんとかしてやめさせようということに関心があるのでは全くない」。その逆である。「無害な教会を保護すること」は「国家に敵対する他の教派どもを崩壊させ、教会的・宗教的な領域における分断を促す」のである¹⁵⁾。

自由教会は、告白教会潰しのために利用されただけであった。この認識は屈辱的であるが、事実として認めざるをえない。

5. それでは、バプテストの中には、ヒトラーやナチズムを批判するような声は皆無だったのだろうか。実は、バプテストの中には、千年王国的信仰の傾向の強い人々がいて、その人々の中には、ナチスの政権が神に敵対する勢力であり、ヒトラーこそ黙示録13章に登場する反キリストだと確信する人々がいた。

13) *ibid.* S. 96, 邦訳 89 頁。WZ 1937, S.267-269.

14) *ibid.* S. 96, 邦訳 89-90 頁。Karl Barth, *Zwinglikalendar* 1939.

15) *ibid.* S. 98, 邦訳 91 頁。Zeitschrift für Kirchenrecht 3 (1953/54), S. 377.

彼らの中の何人かは、実際にも説教壇上からそれを語り、おそらくゲシュタポのスパイによって摘発され、裁判にかけられた。1940年に、東プロイセンの W. Krause 牧師やフォークトランドの O. Meinhold 牧師の名前が記録されている。バプテスト同盟では、彼らの裁判を支援すると同時に、他の諸教会に、同様なことにならぬため慎重にするよう注意を呼び掛けている。これらの牧師は当然のごとく有罪になったと思われるが、彼らの運命についてはよくわからない。すでに第二次世界大戦が始まっており、混乱の中で消息不明となったのかも知れない。

6. ユダヤ人の教会員をナチスの手から守ろうという試みは、皆無ではなかった。1936年に、ベルリンでユダヤ人の教会員の葬儀が行われ、ナチス系の週刊誌『突撃者』が、下品なパンフレットでそれを侮辱したとき、バプテスト同盟は帝国教会省に抗議を表明した。

「私たちは、私たちの教会にいる何人かのユダヤ人キリスト教徒を、教会のメンバーとして扱い、彼らを晩餐式においても婚礼の祭壇においても同等の権利のある者として扱うことを、間違いだとは考えていません。」¹⁶⁾

この勇敢な抗議は完全に無視された。情勢がますます悪化し、戦争が始まり(1939年9月ドイツ軍のポーランド侵攻)、ユダヤ人の大量移送が始まる頃になると、告白教会の抵抗運動も事実上停止していた。バプテスト教会においても、アーリア条項は沈黙のうちに意識的に容認されていた。ユダヤ人の兄弟たちの運命を憂慮する声は、当時の個人的な手紙の中に現れているが、それが何らかの形をとることはなかった。そればかりか、教会で旧約聖書を用いることさえ、はばかれるような空気が流れていた。

ハンブルクにあったバプテスト系のデアコニッセンハウス(病院や福祉施設で働く奉仕女たちの修道院の共同体)は、「シロアー」という自身の名称を、それが旧約由来の言葉であるがゆえに、Albertinenhaus と改称することになった。

バルダースは総括して次のように述べる。「私たちバプテストは、大多数のドイツ人と同様に、ユダヤ人のためにも、いわゆる安楽死させられた人々〔障

16) *ibid.* S. 102, 邦訳 97 頁。

碍者] のためにも、あまりにもわずかししか行動しなかったのである¹⁷⁾。

■ バプテストはなぜ抵抗できなかったのか

第二次世界大戦が始まってからのバプテストの状況は、他のドイツ国民一般の状況とほとんど変わらない。物資の不足のために、出版事業は著しく制限され、男性信者が、牧師も含めて数多く軍務に狩りだされた。若者のいない教会堂では、彼らの無事を祈ることぐらいしかできず、その教会堂も戦争末期の空爆の中で数多く破壊された。ハンブルクの神学校も、カッセルの出版事業部も、ベルリンの同盟本部も廃墟となった。

戦争が終わった後は、破壊と崩壊の廃墟の中で、多くの教会と同じく、バプテスト教会もまたひたすら再建と取り組む他なかった。ナチズムの支配下での自分たちを振り返る余裕はなかったのかもしれない。東西ドイツへの分断(1955年)は、福音主義自由教会同盟(バプテスト)をも二つに分断した。

バルダース論文が書かれた1984年は、東西の対話が進んだ時代である(ソ連でゴルバチョフが最高指導者になったのが1985年、ベルリンの壁の崩壊が1989年)。この頃になってようやく、バプテストはあの時代を振り返ることができるようになったのかもしれない。それはドイツ連邦共和国(西ドイツ)という国全体についても言えるかもしれない。ヴァイツゼッカー大統領の議会演説『荒れ野の40年』(1985年)は、そのことを強く示唆している。つまりそこで、単なる善玉・悪玉論ではないような、無数の無名の庶民の苦難が振りかえられ、心に刻みつけることが主張されたのである。バルダース論文のこの章の最初にも書かれている。「もし私たちがバプテストの場所を——所与の単純な——枠組みの中に、つまり一方に告白教会、他方に『ドイツ的キリスト者』を置くような枠組みの中に位置づけようとするならば、バプテストはいわゆる『中間』に属するのである。すなわち、あの教会的多数派 *kirchliche Mehrheit*、まさに自由教会的多数派であるような中間である。この多数派は両方のサイドから距

17) *ibid.* S. 103, 邦訳 99 頁。

離を保とうと努力したのであり、そしてとりわけ最近になってようやく、歴史家の視野の中にも入ってきたのである」¹⁸⁾。

ナチズムの時代のバプテストは、英雄的に戦った人々には属さない。しかしまた、悪魔的な勢力に属したわけでもない。中には、たとえばパウル・シュミットのよう、状況のよくわかった明敏な指導者もいたし、Carl August Flügel 1876-1948のような、告白教会の人々とつながりを持つ社会活動家もいたが、バプテスト全体を教会闘争に動かすには至らなかった。そこにある意味でバプテストの限界があったと思えるのである。

バプテストはなぜ抵抗できなかつたのか。そのことについて、私は最後に、二つのことを考えたいと思う。

1. バルダースは論文の最後に「解釈の試み」¹⁹⁾として、ドイツのバプテストが第三帝国で抵抗運動に立ち上がっていけなかつた原因を、歴史的な経緯に求めている。ドイツのバプテスト教会は、米国の宣教師たちによって基礎を据えられ、1834年に、Johann Gerhard Oncken 1800-1884を指導者として発足した。その後100年間の歴史の中で、彼らは苦勞をしながら各個教会 Gemeinde を立ち上げていった。しかしヴァイマル共和国時代(1919-1934)にいたるまで、領邦教会からは蔑視されていたのである。ヒトラーが政權の座についた1933年の時点で、バプテストには345の教会が属していた。ところがここで思いがけないことが起つた。それまで領邦教会体制の中で少数者の孤立を味わっていたバプテストや他の自由教会が、ナチス時代、政權からある種「優遇される」という「幸運」(?)を味わつたのである。それまでセクト扱いされていたバプテストの多くの教会にとって、これは誘惑だつたと思われる。バプテストの多くの人々は、この「優遇」が領邦教会を弱体化させる手段に過ぎないということに気づかなかつた。あるいは気づかないふりをしただけだつたかもしれない。

バプテストの中にも、それに抵抗して、告白教会寄りの立場をとる牧師や信徒がいなかつたわけではない。上で挙げたカール・フリュッケなどは、バプテ

18) *ibid.* S. 87, 邦訳 75-76 頁。

19) *ibid.* S. 122f.

ストの出版社 *Oncken Verlag* の編集者であったが、第二次大戦直前に、ナチス当局から言論活動を禁止されている²⁰⁾。シュテッティンの牧師 *Max Slawinsky* は、「ハイル・ヒトラー」と挨拶する代わりに「*Heil Christus!*」と常に述べていた。1940年の彼の「事故死」は、おそらくこのことと関係があると推測されている²¹⁾。しかしこのような勇敢な人々は多くなかった。

K. H. Voigt の前記論文 “*Freikirchen im Nationalsozialismus*” によれば、告白教会の側にも、自由教会（バプテストやメソジストなど）に対する軽視があったという。1934年のバルメン会議のさいに、ドイツ福音主義教会は五つの自由教会にも参加を呼びかけた。しかし自由教会に割り当てた代議員数は、五つの自由教会の全体について、たった一人だけであった。この「奇襲」に自由教会は対応できず、代議員を送ることはできなかった。バルメン会議の後にメソジスト教会から、自分たちはバルメン会議とどのように関わるかを期待されているのかと問い合わせを受けた *Hans Asmussen* は、「事後的に賛同すれば参加可能」という素っ気ない返事をしている。カール・バルトは、そもそも自由教会から問い合わせがあったのだという経緯は知らされていなかったため、当惑した。バルトはアスムッセンへの返書（6月12日）に次のように書いている。

「自由教会は告白会議に参加したいというのだろうか。どのような自由教会が関わっているのだろうか。そうか、古ルター派、古改革派、自由主義が支配的な時代に由来する「積極的」フランチェスコ教会なのか。それなら比較的問題は簡単だ。……バプテストやメソジストが問題だとすると、もちろんもっと難しくなるだろう。われわれの基本線を宗教改革派的でない起源を持つ諸告白へと拡大すること、それゆえそのようなグループをも「同盟」に入れるということは、確かに問題外であろう」²²⁾

自由教会との「連帯」は、告白教会の側でも視野に入っていなかった。この時点では、バルトも、英国で始まった諸教派は視野から抜け落ちていたのである。

2. もう一つの問題は、「歴史的な経緯」というよりも、バプテスト主義そのものの中にひそむと思われる弱点・脆弱性である。「バプテスト主義」として

20) *ibid.* S. 345. 邦訳 84 頁, 註 31 (訳註) 参照。

21) *ibid.* S. 123.

22) *Christen im Dritten Reich* (註 1), S. 100.

語られる、①聖書主義、②万人祭司主義、③会衆主義、④各個教会主義、⑤政教分離と非国教会主義、⑥信仰者の浸礼などの中で、万人祭司主義、会衆主義などは、均制化を要求するナチズムの圧力の中で、指導者原理をある程度相対化してバプテスト的な自由を保持することに役だった。しかし、各個教会主義、万人祭司主義、政教分離（非国教会主義 Non-konformismus）などは、厳しい迫害下でそれと闘う力にもなりうるが、逆に宥和的状况の中では、政治的状况からの逃避の原因ともなりうる。バプテストは、それに属する教会の全体が意志一致して、強大な敵と戦うのには向いていない。バルダースが指摘しているように、「伝道すること」さえできるならば、社会批判的側面や貧者救済的な側面が後退することがありうる²³⁾、その結果として、ドイツではそこまでいかなかったものの、時には権力者の側に立って、弱者の弾圧に参加するということも、ありえたのである²⁴⁾。この点については、私たちバプテスト教会自身が、よく自戒する必要があるのではないだろうか。

23) cf. Balders, Ein Herr, S. 95; S. 123, 邦訳 88 頁以下、及び本論集邦訳(24)頁。

24) ここでは、初期のバプテストがクロムウエルのアイルランド遠征に参加した歴史的経緯を想起している。